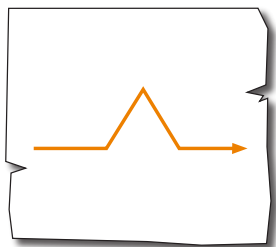


7 THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE 7つのワクワク枠 みんなのコンパス①

第7フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

ラブラブになって
幸せを増やしてね♡♪

恋人^る瑠音^ね、おじいさん…と愛し合う
青年期さんぽのフルーツフル果実物語

SAMPO FRUITS



みんなのコンパス①



プロローグ

167

みさき かえ みち
岬からの帰り道——

音楽イン ♪歩み Footsteps

さか くだ ある る ね ぼく
坂を下って歩く溜音と僕。

「おじいさん、カッコよくて、すてきな人だったね？」 かのじよ あか
い声で言った。

「そうかい？」 みうち けんぞん こた ぼく
身内を謙遜するかように応える僕。

「そうよ。だって——、——。 かのじよ
私のこと、“カワイイ”って言って
くれたよ。アハハッ♪」 はにかむかのじよ えがお
彼女の笑顔。

——かわいい。

「——ランプベリーのこいぬ ころ
子犬の頃のように、かわいいよ」

かのじよ た ど
彼女は、ふいに立ち止まった。

ぼく た ど
僕も、つられて立ち止まる。

「——わたしも、ランプベリーに会いたかったな」とかのじよ
彼女。

「——」 なに こと ぼ う
何も言葉が浮かばなかった。

「それにしても—— 子犬の頃のように、かわいってというのは、
 なんだか微妙かも——」 彼女は、とぼとぼ歩き始めた。

「あ、ゴメン、ゴメン」 僕も歩き出しつつ、「か、わ、い——
 ——た ——ち？」

「かわい—— たち？ “かわいたち” ってなあに？」 彼女が聞き
 返した。

「——自分でも、よくわからない。——イタチの一種とか？」

「——。——プー！ フフフ、アハハハッ！ おっかしい。

——川に住んでいるイタチとか？ フフッ！」

音楽 ♪ 歩み Footsteps 168 へ続く

168

「——あつ、そうだ！ あれ、“カワウソ” っているじゃん」と僕。

「え？ あの、かわいらしい動物よね？」と溜音。

「そうそう。それで、カワウソってさあ—— 主に川辺で暮らす

“イタチ科の、ほ乳類” なんだよ」

「え？ ——ウソお？」

「ホント。それで、昔から日本の川辺に生息していた“イタチ科の、
 哺乳類” は、“ニホン・カワウソ” と呼ばれているんだ。

ちなみに、海辺で暮らす“イタチ科の、ほ哺乳類” は、ラッコだよ」

「へえー。さすが理系。

——私、ニホン・カワウソって見たことないよ」

「こっちもだよ」

「——アハッ♪ どこの動物園^{どうぶつえん}に行けば、見られるのかなあ——」

「え？」・・・「きっと、——どこの動物園^{どうぶつえん}に行っても見られ
ないと思う^{おも}」

「え？ どうして？」

「だって—— 絶滅^{ぜつめつ}しただろうと言われて^いいるから」

音楽急停止 ♪歩み Footsteps

「ええー!？」 彼女は立ち止まった^{かのじよ た ど}。

僕も一緒に立ち止まった^{ぼく いっしょ た ど}。

「昔^{むかし}から日本^{にほん}で暮^くらしていたカワウソ、ニホン・カワウソは、ずい
ぶん前^{まえ}から生息^{せいそく}が確認^{かくにん}されていないんだって——」 僕の説明^{ぼく せつめい}は、
絶望^{ぜつぼう}的^{てき}だった。

「——そう。 ——。 ——悲^{かな}しいね」 明^{あき}らかに曇^{くも}っている彼女の
表情^{ひょうじょう}——。

「ああ。 そうだね」 共感^{きょうかん}している僕の表情^{ぼく ひょうじょう}——。

169

ゆっくり歩^{ある}き始^{はじ}めるふたり——。

「ニホン・カワウソは—— どうして絶滅^{ぜつめつ}しただろうと言^いわれるま
でになっ^なってしまったの？」 瑠音^{るね}が悲^{かな}しげに尋^{たず}ねた。

「——河川^{かせん}の環境^{かんきょう}が悪化^{あつか}してしまったせいだったとか、毛皮^{もうひ}に使う
ため^{ため}に人間^{にんげん}が猟^{りょう}で獲^とり過^すぎてしまったせいだったとか…いろい^いろ言^い

われているようだよ」ふたりは立ち止まった。

「そう——」彼女は明らかに沈んでいた。

ああ、なんとか悲しい気持ちを紛らわさなくては——。

あっと、えっと、・・・——そうだ！

「——かわいいよ」本心を言った。

「——」ノーコメントな彼女。

僕に向けられたのは、彼女の軽蔑のまなざしだけのようで——

タイミング悪すぎ！

そのときだ。ふと、手の中の封筒に意識が向いた。

！！！！

「——あっ、そうだ。さっそく、次のフレームを見てみない？」と

僕。

「え？」

「第7フレーム——最後のワクワク枠——」

「あ、それもそうね。見てみましょう」

「うん。——じゃあ、行くよ？」

「はい。——来て」

その封筒の中に手を入れると、そろそろと紙を引き出した。

「不思議——」それが彼女の第一声だった。

「——え？ 第3フレームの一例？」それが僕の第一印象だった。

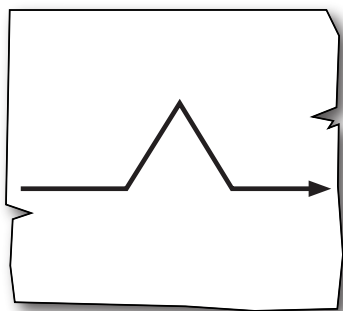
音楽——テーマ曲イン

♪ハーモニー Harmony

タイトル流れて。

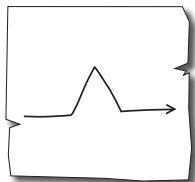
——音楽フェード・アウト

第7フレーム



170

じっか たち じぶん きたく ぼく みやげ
 実家を発ち、自分のアパートに帰宅した僕は、お土産のさくらんぼ
 をほおばりながら、それを書き込んだ。



——こんな感じがいい？

でも——

て も 持 っ て も 話 し け っ て も、うんともすんとも言わず、コンパス
 の針の絵が浮かび上がり、それがクルクル回るだけだった。

ひょうし ぬ ぼく つくえ うえ
 拍子抜けした僕は、しかたなく、ペーパー・コンパスを机の上に
 お置いた。

それから、音楽を聴こうと思い、CDを手に取った。

すると——

プルプルプル… ペーパー・コンパスが小刻みに震え始めた。

——ん？ 何だ？

フワフワフワ… 次は、やや大きく、振れ始めた。

——んん！？ 何だ何だ！？

そのまま、しばらく経つと——

フワリン！ ペーパー・コンパスが空中に舞い上がった。

！！！！

171

ペーパー・コンパスは、そのまま上昇を続け、天井にぶつかった。かと思ふと、壁にぶつかり、テーブルにぶつかり、本棚にぶつかり、電灯にぶつかり、床にぶつかり…それらの“ランダムなぶつかり”をどんどんと加速させ始めた。

しまいには部屋中のありとあらゆる物に、猛スピードで、ぶつかり続けるペーパー・コンパスに至った。

そこらじゅうに散らばる、CD、さくらんぼ、本、写真…。

それは、部屋全体を巻き込んでいる竜巻のようで――

「いったい、何なんだあ!？」 大声で叫ぶ僕。

「アアッ、アアッアッア! アアッ、アアッアッア! …」

ペーパー・コンパスは何か声を発している様子だった。

あまりに素早く動き続けるペーパー・コンパスを手にとることなど、到底できそうもなかった。

「オフ! オフ!」 それも全く効果がなかった。

もう、どうしようもないとギブアップしかけた、まさに、そのときだ。別の声が聞こえ始めたのは――。

「よーし、よしよし、よしよし…」

172

「よーし、よしよしよし…」 ペーパー・コンパスは次第にスピー

ドを緩め、ベッド上に舞い降りた。いつしか最初の声も、おさまっている。

「——ごめんなさい！」 コンパリーチェの声だった。

「え？ 何が、どうなって、どうなったんだい？」 僕が尋ねた。

「本当にごめんなさい。部屋、散らかっちゃったね。

——あつ！ さくらんぼも…」

「うん—— だから、いったい、何がどうして、どうなったの？」

「えっと、その、——わたしたちの赤ちゃんなの」

「——へ？」

「第7フレームの担当は、わたしたちの子なのよ」

「ええ！？」

「幼名コンパルンクル」

「——」

「そうね—— 人間の赤ちゃんで言えば、生後数週間ぐらい？」

「ちよ、ちよっと待った。なぜ、よりによって——」

「間に合ったから」

「——」

「それに、わたしたち、信頼しているの。あなたたちなら、大丈夫だろうって」

「待った、待った！ 生まれたばかりの自分たちの赤ちゃんだぜ！？」

どこにそんな無責任な親が—— これじゃ、育児放棄だよ！」

「——5つ子だったの」

「が！？」

「上の子たちがコンパルンクル、コンパリンクル、下の子たちが

コンパレンクル、コンパロクル」

「——」 . . .

「もちろん、上と下の子たちは私たちが面倒みるわ」

「だから、ちょっと待った、ちょっと待った。そういう問題じゃ——」

「——よろしくね？」

「だから待ってくれ！ 子育てなんて、全く、やったことないよ！」

「私たちにとっても、初めての経験よ。——みんな誰だって、最初は、そうでしょ？」

「そりゃ、そうだけど——」

「時間がないの。今、話せるのは、特例中の特例なのよ」

「——」 頭の中がパニックになり、何も言葉が浮かばない——。

「人間の数倍のスピードで発達するわ。いずれ、言葉も話せるようになるはずよ。——あ、ハイ！ あ、もう失礼しなきゃ！」

「え！？ あ、待った！ いろいろ聞きたいことが」

「ああ、時間切れ！ よろし」

「よろし？」

コンパリーチェとの応答が、まるつきり途絶えた。

173

幼名、コンパルンクル——

この今のペーパー・コンパスが、あいつらの赤ちゃん——

そんなのって、あり？ ……

モンモンとしながら、“これはここ、これはあそこ…”そんな具合に、CD、さくらんぼ、本、写真…を片づけ続けた。

すると——

ブルブルブル… !!!

さらに——

フワフワフワ… !!!×3

「ああ——！！」

急いでコンパルンクルを手に持った僕は、

「よーし、よしよしよし…」 ——あやした。

どうやってあやすのか、よくわからないまま、自己流に精一杯、揺り動かしたただけだったけれど—— フワフワは、それなりにおさまってくれた。

——ふうー。あせったぜ。

でも——

ブルブルは、数分置きに再開した。

その度に、懸命にペーパー・コンパスをあやした。

そうこうしていると——

ブルブルブル… トウルルルー♪…

コンパルンクルの震えと電話の呼び出しが同時に始まった。

「あ！？」

174

一瞬間迷った僕は、まずコンパルンクルを片手で持ってあやし始め、
そうしながら、もう一方の手で電話の応答をすることにした。

「よーし、よしよしよし… ハイ、もしもし。よーし、よしよし…」

「あれ？ どうしたの？」 受話越しの溜音の声。

「おう。——子育てだよ。赤ちゃんペーパー・コンパスの。幼名コンパルンクル。よーし、よしよし…」と僕。

「ええ!？」 彼女は驚いた。

プルプルプル…

「あー！ よーし、よしよしよし!…」

「——なんだか、一生懸命そう」

「あ、あたりまえだろ？」

「——フフッ」

「よーし、よしよしよし!…」

「でも、大変そうね」

フワフワフワ…

「ああ！ わかった！ よーし、よーし、よしよしよし… よーし、よしよし…

——あ、ゴメン。いったん切るよ？

あ！ よーし、よしよしよし…」

なぜだろう？ このときの僕は、これを自分一人で引き受けるべきだと思い込んでいた。

175

それを何回か繰り返した結果、両手で洗濯物を広げて揺らすようにコンパルンクルをフワリフワリと揺らせば、比較的よくあやせられる—— そんな“自分なりの結論”に達した。

そうすることで、プルプルが、“数分置き”から“十数分置き”へと変化したからだ。

でも—— 睡眠も、まともに取れないような、そんなハードな生活が長続きするはずもなく—— 土曜のお昼近く、内心わらにもする気持ちで溜音に電話した。

「はい、初果陽です」

「あ、夏岬です。今、大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ」

「——」

「どうしたの？」

「どうもこうもあるっていうか—— そっちは、今、どうしてた？」

「あ、レポート書いてた。“生きる力”について思うことを書きなさいだって——。

——アハッ！ “生きる力”って何だろうね？」

・・・ 「——知らねえよ。ただ、今のオレの“生きる力”は、——3%未満？」

「ねえ、だからどうしたの？」

176

瑠音のアパートの玄関にて——

「すまねえ——」 そう言いながら、僕はコンパルンクルを彼女に引き渡した。

「本当に、頑張り屋さんなんだから——。

——じゃあ、次は私の番ね。なんだか楽しそう♪」 瑠音は、なぜかイキイキとしていた。

自分なりに見つけた“あやし方のコツ”を彼女に伝授した僕は、自分のアパートに戻って爆睡した。

177

その日の夕方——

ユーウツな気分にはまりながらも、コンパルンクルを引き取るために、僕は瑠音のアパートにたどり着いた。

すると、意外な言葉が待っていた。

「ねえ。もうしばらく一緒に居てもいい？」と彼女。

「え？ もちろん。——え？ でも、平気なの？」と僕。

「平気も何も—— 楽しいよ♪ それに、新しいコツもつかめているようだし♪ フッ♪」 彼女は、明るく、そう言って笑った。

「ねえ、どうして、そんなに楽しめるの？」

「だって—— 赤ちゃんを心地よくさせたり、喜ばせたりするのっ

で、ただそれだけで楽しくない？」

パラララ… — 目からウロコが落ちた。

そうだ。僕は、“コンパルンクルがぐずりはじめたらどうしよう、泣き始めたらどうしよう、暴れたらどうしよう…” そんなネガティブな『Against』の方向のことがっかり、考えてしまっていた。

このときすでに、プルプルは“数時間近く置き”へと変化していた。それは、明らかに、彼女のポジティブさ、『For』の方向性のおかげでもあった。

178

それから数日の間に、プルプルは、さらに“半日置き”へと変化した。それは、瑠音が見つけた新たな3つのコツのおかげでもあった。

《瑠音が見つけた新たな3つのコツ》

1. なでること。 — 特にコチョコチョコすると笑う。
2. 歌うこと。 — 特に“ピピーピー♪”が好きらしい。
3. 散歩すること。 — 特に自転車で乗ってコンパルンクルを風になびかせると大喜びする。

「え！？ コンパルンクルの散歩？」と僕。

「そう。これって、とっても気持ちいいみたい。たぶん、快適に空中遊泳している感じがするんでしょうね。

— 人に見られると、ちょっぴり恥ずかしいんだけどね。フッフッ」

この際、^{さい}恥^はずかしさなんて、どうでもよかった。

それからほとんど毎日、^{まいにち}晴^はれの日^ひはもちろんのこと、^{あめ}雨^ひの日^ひも風^{かぜ}
の日^ひも、^{ぼく}僕はコンパルクルを^{さんぽ}散歩^つに^だ連れ出した。

ランプベリーのときと同じように――。

179

そうやって――

^{ぼく}僕らは、それなりに“^{こそだ}子育て”をこなしたんだ。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

“^{ほう}プチ・マップ作り”の方は、ちっとも^{すす}進まなかつたけれど――

それから日々は、僕らにとって、いろんな^い意味^{しあわ}で幸^あせだった。

コンパルクルは^{じょじょ}徐々に^{くうちゅう}空中遊泳^{のうりよく}の能力^はを発達^はさせ、^へ部屋^やの物^{もの}
に^{じょうず}ぶつからないよう^{いどう}上手^いに移動^いできるようになった。

コンパルクルのプルプルが、めったに^み見られなくなる^{いっぼう}一方で、
^{ぎやく}逆に“^{わら}キャキャキャ”という^{ごえ}笑い^き声^{ひんど}が聞^ふかれる頻度^ふが増えた。

^{ぼく}僕らは、^はこうした^は発達^すを^{よこ}素直^{しやうらい}に喜^はび、^は将来^はのさらなる^は発達^{たの}を楽し^{たの}
みに^はし^じ始めた。

こうして“^{こそだ}子育て”に^{よゆう}余裕^{だいがくせい}ができ、^な大学生^{じゆうじ}活^{かん}にも慣^なれて自由^{じゆうじ}時間^{かん}
が^ふ増^ふえると、^{ぼく}僕は、^すいよいよ、^{おも}好きな^{ぞんぶん}テーマ^{ぶん}について、^{おも}思^{おも}う存^{ぞんぶん}分^{ぶん}、
^{まな}まな^{ほじ}学^{まな}び^{ほじ}始めたんだ。

医学部は確かに必修科目が多くて大変だったけれど、特に教養部
時代は、受験生時代に比べれば、ずっと多くの自由時間があった。

その貴重な自由時間に、試験のためでもなく、何かに制限される
わけでもなく—— 心ゆくまま、心ゆくまで、のびのびと自由に学
んだ。

彼女に言わせてみれば、当時の僕は“水を得た魚”状態だったら
しい。自由時間の多くを、図書館や書店で新鮮な情報に出会うこと
に充てた。ライフサイエンスのみならず、『発達心理学』や『人間性
心理学』を含む心理学にも、僕は惹かれた。

そうして、駆け足で月日が流れ——

大学最初の夏休みの足音が聞こえてきそうな季節、コンパルンク
ルが初めて言葉を発したんだ。

その言葉とは、“ママ-パパ”でも“お姉ちゃん-お兄ちゃん”で
も“ひるねちゃん-さんぽくん”でもなく——

“ピピピーピピー♪”だった。

——言葉？

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 180 に続く

180

夏休み前の最後の日曜日の正午過ぎ、僕のアパートにて——

「ピピピーピピー♪ ピピピーピピー♪」 コンパルンクルが、フワ

リフワリと波打つような空中遊泳をしていた。

その“上下に流れるような動き”は、あたかも“第7フレームが示す流れ”を描いているようでもあった。

「あー、私のせいだ。私がいっぱい歌ったばかりに——。

私の育て方がまずかったんだわ。きっと——」と溜音。

「そんなこと、ないんじゃない？」と僕。

「——まあ、確かに、これからも少しずつ発達してくれそうな気がするわよ。でも、ほかのやり方をしていたら別のあり方をしていたかもしれないと思うと、なんとなく不安というか、失敗のように思われるというか——」

「——自信ない？」

「ええ、ないわ。——いえ、ある？　いえ、ないわ——」

「フッフ。僕からすると、今までのやり方で十分よかったと思うよ。コンパルンクルが健やかに育っているからこそ、ピピピーピピー♪があるような気がするし——」

「そう思う？」

「うん、そう思う。それに、ほら——何より、コンパルンクルは、こんなに楽しそうにしているよ」

「——ウン。——。しばらく、このまま様子を見ようかな？」

「うん。それがいいよ。きっと」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 181 に続く

181

その後も相変わらずフワリフワリと上下に波打つように空中遊泳しているコンパルンクル——。

「あ、そうそう、思ったんだけどさあ、第7フレームって、あれを連想しない？ あれを——」と溜音。

「あれって—— もしかして、あれのこと？」と僕。

「そう、それ。前に話した“社会の中で前進するために乗り越える、社会的なハードル”を連想するわよね」

「え？ 君のあれって、そのこと？ ——僕は全然違ったことを連想していたよ」

「え？ あなたのあれって何だったの？」

「うん。活性化エネルギーってやつ？ 生物学や化学の中に登場していたよね？」

「——え？」

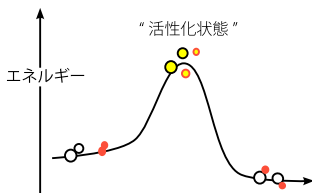
「さまざまな化学反応は、活性化状態、いわば“エネルギーのハードル”を乗り越えて初めて達成されるってやつさ」

「っもう、理系なんだから——」

「しょうがないじゃん」

「フフフ♪」「アッハッハッ！」

これらの違った連想内容が1つにつながるとは、当時、夢にも思わなかった。



音楽終了 ♪心地よき日々 Comfortable Days

182

「ピピピーピピー♪ ピピピーピピー♪」 コンパルンクルの様子
は、相変わらずだった。

「——」 無言のまま、コンパルンクルの様子をじっと見続けている
る溜音。

「——大丈夫？ 疲れない？」と僕。

「ええ、大丈夫よ。心配してくれて、ありがとう」

僕の方は、そのコンパルンクルの単調な動きのせいか——
意に反して、まぶたが、だんだん重たくなっていた。

眠ってはいけない。彼女に悪いよ。

——でも、眠い。

少しだったら、眠ってもいいんじゃないか？

彼女は、コンパルンクルに集中しているはずさ。

きっと気づかないないよ。

それに、ひるねちゃんの愛称だぜ！？ きっと許してくれるさ。

いや、でも—— . . .

っていうか、実際、眠るわけじゃない。目を閉じるだけだよ。

そう。目を閉じながら、考え続けるのさ。

うん。 . . .

結局、僕は、そのまま目を閉じ、あれこれ考えをめぐらせた。

いかにも考えているポーズを取りながら——。

183

——第7フレームは、やはり社会的なハードルを意味している？

それが、第7のフレーム・フォー・オール・ライフの意味？

うーむ。それとも、別の見方をした方がいい？

もっと、ほかの発想をした方がいい？

たとえば、化学反応を意味している？

でも、化学反応と個人的な人生が関連していそうもないし——

・・・

うーん。なかなか前に進めないや。

・・・

ああ、このまま本当に眠りたくなってきた。

でも、眠ってはダメだ。——でも眠い。

いや、ダメだ。

・・・

そのときだ。

あ！ ひらめいた！？

ひょっとしたら、第7フレームは個人の心の中のハードルを意味しているんじゃないか？

例えば、これも—— あれも、それも…例は、山ほどある。

——うん。これは、ある個人の営みが前進する際に心の中に生じているハードル、個人的なハードル、心のハードルだ！

184

「… —大丈夫？ —大丈夫？」 瑠音の声が聞こえた。

ハッとした僕は、パッと目を開けた。

「ああ、大丈夫、大丈夫」 あわててフォローする僕。

「もしかして、ずっと眠っていたの？」

「ん？ いや、だから、その、目を閉じながら、心の中で、ずっと考え続けていたのさ——」

ふと見ると、コンパルンクルは昼寝をしているようだった。

テーブルの上にとどまりつつ、まるで“ゆっくり、ゆったり深呼吸”をしているかのように、一部が上下運動している——。

「そうそう、それで、ひらめいたんだよ！ 第7フレームの意味！

ついさっき、ひらめいたんだ」、

「ええ！？ ——どんな意味？」

「やっぱりハードルを意味しているんだよ。ただ、この場合、社会的なハードルというより、ひとりの人間の営みが前進する際の個人的なハードル——ある人間が何かを認識してから何かを実現するまでの間に生じている“心のハードル”なんだけどね」

「心のハードル——」

「そう。例えば、コンパルンクルのプルプルを見て、とっさに、あやそうと決める形で乗り越える“心のハードル”とか。

例えば、コンパルンクルの現状を見て、このままの育児でいいのか不安に思いつつも、このまま様子を見ようと決める形で乗り越える“心のハードル”とか。

例えば、眠気を感じ、眠っては悪いと葛藤しつつも、目を閉じて考えようと決める形で乗り越える“心のハードル”とか。

例えば、第7フレームについて、あれこれ迷いつつも、こう解釈して活用しようと決める形で乗り越える、今まさに、ここにある“心のハードル”とか。

つまり——第7フレームの流れは、何かを認識した人間が“心のハードル”を乗り越えて何かを実現するまでの流れを意味しているんだよ」

「——なるほど。それ、きっと、いいアイデアよ！」

「そうっしょ？」

185

「そうすると、第7フレームを簡単に説明すれば、“認識して、判断して、実現して”という流れよね？」と溜音。

「そうさ。もちろん、もっとシンプルに、“見て、決めて、行動して”でも、“聞いて、決めて、動いて”でも、“ふれて、決めて、動かして”でもいいと思うよ」と僕。

「そうすると、その具体例も、いっぱいあるわよね？」

「そう、いっぱいある。“プルプルを見て、とっさに決めて、あやす”とか、さっき挙げた心のハードルと関連する例だけでなく——

例えば、コンパルンクルの散歩好きを知り、恥ずかしさ乗り越えてそれを日課にしようと決めて、実際にそうするとか。

たとえば、自分の体力の限界を悟り、やむを得ず君に助けを求めようと決めて、実際に電話するとか。

たとえば、生きる力が3%未満の哀れな男を助けようと決めてくれて、実際に助けるとか」

「フッフ♪ ねえ、もしかしたら、人生は“認識して、決めて、動かして”の繰り返しである—— なんて言えたりしてね？

——それに、トンガリ山も、何となく“決める”っぽいわ」

「アハハッ。そうだね。

ただ—— “認識しないで”、“決めないで”、“動かさないで”という人生もありうるから、人生のすべてではないだろうけれど」

「あ、それもそうね♪」

186

ともかくにも、この“第7フレームの解釈”を支持する例が、次々と見つかる一方だったんだ。

たとえば、次のような流れ——

CDや本や写真を手に取り、ここに戻そうと決め、実際に戻す。

コンパスとコンパリーチェの両想いを知り、何かいい方法を考え出そうと決め、実際に考える。

“きっと本屋さんに行ってみるといいよ”という瑠音さんのアドバイスを聞き、次の日曜に書店に行くことに決め、実際にそうする。

スランプのとき、“休んだ方がいい”という岬のおじいさんのアド

バイスを聞き、今は勉強を休むことに決め、実際にそうする。

瑠音さんのウワサについて、心笑君に“よく確かめた方がいいよ”と励まされて、よく確かめようと決め、実際にそうする。

僕の『北の国から'89帰郷』好きを知った心笑君が、『北の国から'87初恋』の録画ビデオを僕に譲ろうと決め、実際にそうしてくれる。

『旅人』という自伝で湯川秀樹と再会し、それをヒントにして新たな目標を定めて、実際に、そこに向かって前進する。

初夏を感じ、おじいさんに会いにいこうと決め、実際にそうする。

宝の地図を見つけ、宝探しに行こうと決め、実際にそうする。

...

もちろん、彼女も見つけた。例えば、次のような流れ――

小学校の担任の先生に会い、それをヒントにして目標を定めて、実際にそこに向かって前進する。

女子更衣室で倒れた僕を見て、急いで保健の先生に知らせようと決めて、実際に知らせる。

アイス・オン・フルーツ・イン・ヨーグルトのアイスが溶け始めていることに気づき、えいやと食べようと決め、実際に食べる。

自転車の荷台に座り続けているのが危なそうだと思い、荷台を下りて押そうと決めて、実際にそうする。

感謝の気持ちをしっかり伝えなきゃと思い、帰り道で待とうと決めて、実際に待つ。

自身の合格を知り、お守りを作ろうと決めて、実際に作る。

僕の不合格を知り、励ましに行こうと決め、実際にそうする。

僕の顔が近くにあることを知りながら、目を閉じようとして決めて、

じっさい め と
実際に目を閉じる。

“夕方から雨”の予報を聞いて、早めに洗濯物を取り込もうと決め、

じっさい
実際にそうする。

宣伝を見聞きしたり商品を手にとったりして、買うか買わないかを決め、実際にそうする。

料理の味見をし、調味料を足すかどうかを決め、実際にそうする。

…

187

「いいお嫁さんにも、なれるよ」と僕。

「でしょでしょ？ フフ…♪」と溜音。

「アハハ…。 —うん、つまりは、“見たり、聞いたり、知ったり、読んだり、手でふれたり、味わったり、想像したり、連想したり、思い出したり…” その認識内容に応じて、新たな、ふさわしい行動や思考を決めて、実現する—— そのような流れだね」と僕。

「ええ、そうね。 —あつ、“臨機応変”も当てはまるわよね？」と彼女。

「ああ、そうだね。それに“タイミングよく”も当てはまるよ」

「タイミング——」

「そう。疲れているからと休むタイミング」

「夏休みだからと運転免許を取るタイミング」

「初夏だからと、岬のおじいちゃんに会いに行くタイミング」

「ふたりぎりだからとキスするタイミング？」 溜音は、さくらんぼ

のように照れながら言った。

「アハッ！ —まあ、そうさなあ。タイミングよく、キスしたり、
あったり、とったり、休んだり…」 …… 「—あっ！」

「どうしたの？」

「そうだ、わかった！」

「え？ 何が？」

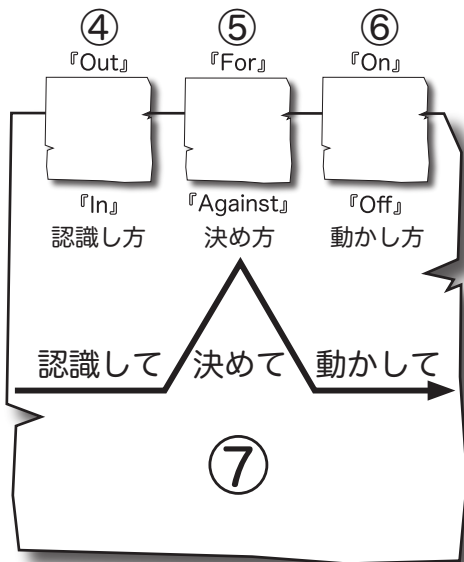
「ほら、気づかない？」

—第4フレームから第6フレームまでとの関係さ！

『In Out』は、どう認識するか、認識し方を示すフレーム。

『Against For』は、どう決めるか、決め方を示すフレーム。

『Off On』は、どう動かすか、動かし方を示すフレーム



「あっ、ホントだ！ わかった！」

188

相変わらず昼寝しているコンパルンクル——。

「確かに、認識し方に応じて、決め方は変わりうるね」と留音。

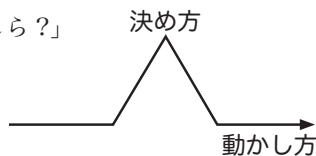


「そうさ。例えば、“何かを短い目で見てイヤでも、長い目で見ればよい”ときもある」と僕。

「そうね。それに、“特定の誰かだけを見てよくても、その誰かを含む、みんなを見れば悪い”ときもあるわ」

「そうだね。——つまり、ズーム・インして見るかズーム・アウトして見るかを根幹とする認識し方に応じて、その評価、価値判断、意志、意欲…などの決め方は変わりうるのさ」

「ええ、そうね。——ねえ、じゃあ、決め方に応じて、動かす方も変わりうるかしら？」

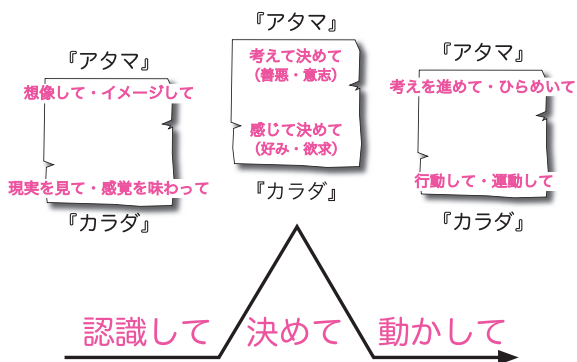


「そりゃそうさ。“好き-キライ、よい-悪い、しよう-するまい、イヤイヤ-喜んで…”などの決め方に応じて、実際にどんなふうにか動かすか——例えば、“くつつくか-離れるか、手に入れるか-手放すか、大きな成果を出す-小さな成果を出す…”などの動かす方が変わりうるのは明白だよ」

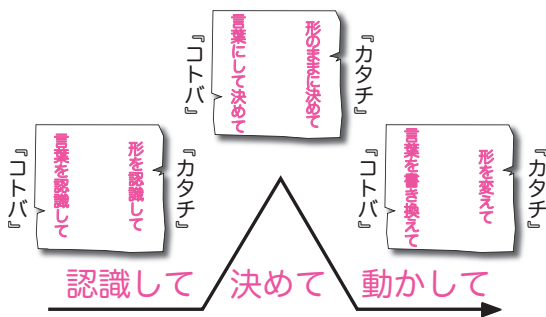
「アハッ♪ それもそうね」

189

「さらには、^{だい}第1フレームとも^{かんれん}関連させられるよ。
 たとえば『カラダ アタマ』なら、^{つぎ}次のようになるよ」と^{ぼく}僕。



「アハッ♪ そうね。
 そうすると—— たとえば『カタチ コトバ』なら、^{つぎ}次のようになるのね？」と^{るね}瑠音。



「そうだね」

190

「——あつ！」 僕は声を上げた。

コンパルンクルは一瞬フワリと浮かび上がり、再びテーブルに舞い降りた。

「どうしたの？」と溜音。

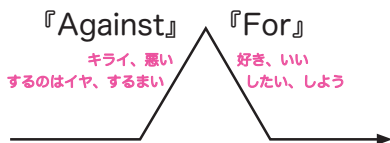
「うん。坂をよいしょこらしよと上ると坂をスイスイ下るのは、どっちがラク？」

「坂を下る方」

「うん。じゃあ、坂を上ると下るのは、どっちが好き？」

「え？」 なぜか彼女は少し驚いた様子だった。「——それもやっぱり、坂を下る方？」

「だろだろ？♪ 僕も。 ——それでひらめいてしまったよ。第7フレームの“トンガリ山”は、坂を苦労して上る方が『Against』、坂をスムーズに下る方が『For』って具合に、それぞれ対応しているだろうって。



例えば、坂を上る部分が“キライ、するまい…”に、坂を下る部分が“好き、しよう…”に対応していると考えられるのさ

「アハッ♪ 確かにイメージとぴったり合っているような気がするね。 ——でも、そんなふうになんまりに意味づけていいのかしら」

「——アレ？ やっぱり？」

191

「あ！でも、この解釈には、大きなメリットがありそうだよ」と僕。

「どんなメリット？」と溜音。

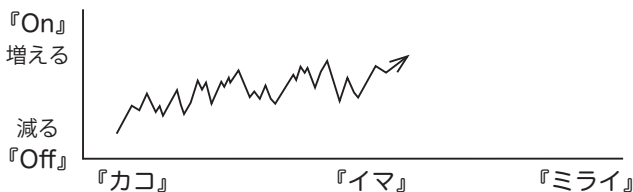
「第7フレームが単なる第3フレームの一種ではないことが、はっきりするというメリットさ。

この解釈のおかげで、第7フレームの意味が、単なる“流れや変化”ではないと確定するのさ」

「——え？ どういうこと？」

「うん。例えば——

第2フレーム『カコ イマ ミライ』と第3フレーム『→』と第6フレーム『On Off』を単純に組み合わせてできるのは——何かの“数や量”などの増減の様子を示す、次のような図になると思うんだ。

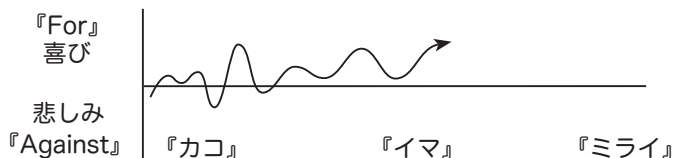


例えば、降水量や気温、株価、体重、人口…の変動とか？」

「——あ、そっかあ」

「うん。ここで第6フレーム『Off On』を第5フレーム『Against For』と交換すれば、今度は、例えば“喜び - 悲しみ人生曲線”になるのさ。

——こんな感じ？」



「アハッ♪ そうよね」

「これらの“数や量”などの増減を示す図や“喜び - 悲しみ人生曲線”の図を支える第3フレームと第7フレームが根本的に違っていると確定するためにも、“坂を苦労して上る方が『Against』、坂をラクラク下る方が『For』”と解釈できることが重要になるんだよ」

「——ええ、そうね」

「つまり、やっぱり“新しいフレーム”なのさ。第7フレームは」

「——それは、子どもが“新しい存在”であるのと似ているね？」

「フッ♪」

「——アハッ。確かに似ているね」

ふたりで、昼寝中のコンパルンクルを見つめた。

192

夏休みに入ってから、コンパルンクルの発達は続いた。

音楽イン♪ Soaring Up Into The Sky

コンパルンクルの発達のスピードは、予想を超えていた。

空中遊泳チャリンポ、写真撮影、買い物、家事…を含む、さまざまな体験を共にすることや、本、音楽、映画…を含む、さまざまな文化と接したことは、コンパルンクルの視野をグングン広げたと同時に、その発達を大いに促した。

特に言語能力の発達には目を見張るものがあった。

例えば、「オン！」と僕らが言うとき——フワリン！

コンパルンクルは舞い上がり、フワリフワリと空中に浮かんだ。

「オフ！」と言うとき——フワフワフワ…

コンパルンクルはテーブルに舞い降り、静止した。

僕らは、コンパルンクルが将来どこかのオーナーにお仕えするときのために考え、“スイッチ・オン、スイッチ・オフのマナー”をコンパルンクルに教えたのだった。

——確かに、半分は自分たちのためであったけれど。

コンパルンクルは、とても素直に従った。

しばらくの間だけは——。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

193

夏休みが明けて間もない頃、コンパルンクルは言うことを聞かなくなりました。

「オフ！ オフ！」

「ギャギャギャ！ いやだぜーい♪ アニキー！

——おいらは、まだまだ、くうちゅうゆうえいをつづけていたいのさ～♪ はっは～♪」

フワリフワリ——

「これができないと、あとあと^{こま}困るよ。

それに、これができれば、^{しょうらい}将来、^{こま}困らないだけでなく、^{ぼく}僕に^{さんぽ}散歩に連れて行って^いもらえるよ」

「いいピョーン♪

おねえちゃんに、つれていってもらおうピョーン♪

——アニキ、だいつキラーイ♪ おねえちゃん、だいすきい～♪」

「——ったく」

「おねえちゃんに、あいたい。あいたーい！

あいにいこうぜーい！」

^{はんこうき}反抗期——

と呼ぶより、「^{みづか}自らの^{いし}意志”の^{めぼ}芽生えと呼びたいと思った。

^{じぶん}自分の^{よつきゅう}欲求を感じとりながら、「^{みづか}自らの^{いし}意志”を^{じぶん}自分で^{はぐく}育むことができるということ—— ^{いみ}コンパルンクルは、ある^{すこ}意味、^{せい}健やかに^せ成長していると思った。

194

「おねえちゃんに、あわせてくれーい！♪ いますぐ、おねえちゃんに、あわせろーい！♪」

ぞく
続、コンパルンクルの主張——。

「だから、もう少し待ってくれないかい？ 来週、きっとお姉ちゃんに会えるから」

「らいしゅうじゃイヤだ！ きょう、あいたい！ いますぐ、あいたい！ ——いまから、あいにいこうぜーい！」

「お姉ちゃんに会いに行きたい気持ち、よくわかるよ」・・・

「——うーん。でも、困ったなあ」

「どうして、こまるんだ？」

「お姉ちゃん、大事な試験を控えているから。」

だから、今は勉強に集中しなきゃならなくて—— もし今からお姉ちゃんに会いに行けば、お邪魔虫になるんだよ」

「シケンで、なんだ？」

「うん。試験というのは、“知識や知恵や考える力をよく身につけたね”って評価すること。お姉ちゃん、この試験をちゃんとパスする必要があるのさ」

「もし、チャントパスしなかったら？」

「お姉ちゃん、夢の実現から遠ざかって、ものすごく悲しむ。」

もしそうなったら、どう思う？」

「——イヤだ。そうなってほしくない」

「うん。僕も同じだよ。」

—じゃあ、どうしようか？」

「うん、まってる。きょう、いくのやめる」

「えらーい！」

—うーん、これは“思いやりの心”の獲得にともなう“過剰な自己中心性の克服”ってやつだね。パパは、うれしいよ。

って、パパじゃないけど」

「ただ— おねえちゃんに、なにかしてあげたいな。

なにをしたら、よろこぶかなあ？」

「うーん、そうだなあ—」・・・「—お姉ちゃんに、手紙を書くのは負担になっちゃうだろうし、—今は何もしない方が一番喜ぶかも。—うん。今は何もしないのが一番の応援になるよ。きつと」

「わかった。何もしないーい♪ 何もしないーい♪」

195

“自らの意志”を周りと調和させながら育てるということ—
コンパルシブルは、やはり健やかに成長していると思った。

育児は、“単に子どもの欲求を何から何まで満たしてあげればよい”ってわけではないのだろう。

“何が本当に子供のためになるのか”の判断は、実は、とても難しいのだろう。

196

その次の週、コンパルンクルは、試験を無事終えた瑠音との再会を果たした。彼女のアパートにて――。

《コンパルンクルの疑問その1》

「ふたりは、けっこんしているのか？」

「――え？」 「結婚はしていないよ」とまどう瑠音と説明する僕。

《コンパルンクルの疑問その2》

「おなかのあかちゃんは、どのようにして、うまれるんだい？」

「――」 「ゴホッ」 赤くなる瑠音とせき込む僕。

《コンパルンクルの疑問その3》

「――ふたりは、〇〇〇したのか？」

「――」 「――」 ふたりとも、さくらんぼのように赤くなった。

はしゃぎながら、フワフワ舞うコンパルンクル――

「こらこら、そういうことを、むやみに口にするものじゃないよ。

お姉ちゃん、明らかに“困っています”って顔しているだろ？」

「――」 黙り込むコンパルンクル。

「フフッ、フフッ♪ ――。男の子の気持ち、私には、よくわからないけど―― やっぱり、そういう興味が湧く時代があるのって、自然なことなんでしょ？」 と言いながら彼女は僕の方を見た。

「――え？」 僕は、思わず疑問の声を上げた。

「男の子だったら、そのくらい探究心があって元気な方がいいのか

もね？」と彼女。

「——ああ、まあね」——そういう問題！？」

「もし、おんなのこだったら—— わるいのか？」《もっともな疑問その1》

——おう、そうだそうだ。

「うーん、それは——、——。ふつうは、そうなんじゃないかな？
——アレ？」やや苦しげな彼女。

「どうして？」《もっともな疑問その2》

「どうしてって、——え？ どうして？」逆に彼女がコンパルンクルに問い返した。イヤな予感がした。

「だって—— オレ、おんなのこだぜ？」

「——」彼女の顔が、明らかにひきつった。

「アッハッハッ！ コンパルンクルはさあ、きっと、“男”と“女”の言葉の意味を取り違えているよ」僕なりに余裕をかまし、サポートしてあげた。

でも——

「そんなわけないだろ。だって、アレがついてるほうがおとこのこで、ついてねえほうがおんなのこだろ？ オレ、ついてねえもん。

ガッハッハッ！」

ズドドドーン！！

197

その新たな認識あら にんしきによって、秋あき ふか なかが深まる中で、コンパルンクルとの向き合い方む あ かた ぼくを僕らは一変いつべんさせた。

音楽イン ♪秋 Autumn

“何が本当にコンパルンクルのためになるのか”を、さらに真剣しんけんに考えながら、コンパルンクルと接せつし始はじめた。

「オホン。“キャキャキャ!”と笑わらえばいいっちゃ」と僕ぼく。

「どうして? ——オレ、そんなのやーだよ! ギャッハッハッ!」

とコンパルンクル。

「ああ、いかん、いかん。“オレ”と言うのも、やめるんよ」

「どうして?」

「どうしてって、そりゃあ、女おんなの子こだから」

「おんなのこだと、——なぜ、“ギャッハッハッ!”や“オレ”をやめなければならないの?」

「——。えっと、つまりは——」・・・ ——なぜだ! ?

「おとことか、おんなとかいうまえに、オレはコンパス・フォー・オール・ライフだぜ? ——アニキたちも、おとことか、おんなとかいうまえに、にんげんだろ?」

「そりゃ、まあ—— まあ、だから——」 ごもっともです。

苦笑にがわらいしている溜音るね——。

コンパルンクルは、予想よそうをはるかに超こえて、たくましく発達はったつしており—— 結局けつぎよく、コンパルンクルをできるだけ溜音るねの元もとで過すごさせることに僕ぼくらは決きめた。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

198

そのことが功を奏したのか杞憂だったのか、12月のクリスマス
が近づくあたりから、コンパルンクルは妙に女の子っぽく振る舞い
始めた。

音楽イン ♪サンタクロース

それはそれで、とても不思議な感じであり――。

「あの子と何を話したの？」 瑠音に、そっと尋ねてみた。

「――女の子どうしの秘密？」と彼女。

「――」・・・

「フッフ♪ 私との話よりずっとずっと大きいのは、やっぱり好き
な男の子ができたことじゃないかしら？」

「ええ!？」

それからのコンパルンクル語録――

「キャキャキャ♪ わたし、すきなコンパスできちゃったあ♡!

「シアワセ♡♪ シアワセ♡♪ キャハハ♡♪」

「いつかけっこんしたーい♪ けっこんしたーい♪ キャハン♡♪」

「ミライのなまえ、コンパリーナにき〜めた♪ ワクワクするう♪」

「わたしも、おねえちゃんのように、やさしくなりたーい♪ やさ
しくなりたーい♪」

「もっと、せっきょくてきになれば、おねえちゃん、きっと、よろ
こぶよお。キャハハン♡♪」

いつしか、恋のアドバイザーにまで到達しており――。

音楽フェード・アウト ♪サンタクロース

199

ゆきど きせつ—
雪解けの季節—

音楽イン ♪春 Spring

コンパルンクルとの別れの季節を迎えた。

その日、晴れわたる空のもと、コンパルンクルと溜音と僕は、大学から最も近い海の砂浜に来ていた。

「父と母があいさつしたいって—」 さびしげなコンパルンクル。

「娘が大変お世話になり、ありがとうございますですう〜！♪」

父コンパースの音が響くと同時に、フワフワ浮いているペーパーコンパスが、なんと、2枚に増えた。

「娘が大変お世話になり、本当に、ありがとうございます。」

おかげ様で、こんなにスクスク育って—。あなた、やっぱり、よかつたわね♪ おふたりにお願いして」 母コンパリーチェの音が響くと同時に、フワフワ・ペーパーコンパスが、なんと、合計3枚に増えた。

「ええ、そうでございますねえ〜♪ コンパリーチェ♪」

「—。それから、兄と姉、弟と妹もあいさつしたいって♪」 少し明るくなったコンパルンクル。

「兄のコンパランクルでござす。妹が大変お世話になり、ありがとうございますでござす」 威厳あり。合計4枚に増えた。

「姉のコンパリンクルです。妹が大変お世話になり、ありがとうございます♪」 清楚さあり。合計5枚に増えた。

「弟のコンパロンクルだじえーい。お姉ちゃんが、大変お世話になり、どうもありがとうございますだじえーい」 わんぱくさあり。合計6枚に

増えた。

「妹のコンパレンクルですよ。お姉ちゃんが大変お世話になり、どうもありがとうございます♪」愛嬌あり。合計7枚に増えた。

個性あふれるみんなのあいさつに圧倒されて、返答に困っていると、父コンパースが口を開いた。

「——あ、それでは、そろそろ、お時間でございますう♪」

「——」黙り込んでいる娘コンパレンクル。

「——あいさつ、するでしょうか？」父が娘に促した。

「——。今まで——いろいろ——アリガ——トウモロコシ！
キャキャキャ！♪」

「こらこらですう～！♪」

「キャハハ♪ どうもありがとうございます！ 今まで、本当に、いろいろお世話になりましたあ♪ お姉ちゃん、大好き♪」彼女の頬にペツタリくつついた。

「——」はにかみながら心笑む彼女。

コンパレンクルは彼女の頬から離れると、今度は——

「お兄ちゃん、大好き♪」僕の額にペツタリ——。

「あ！？」意表をつかれて、あせった。

そうして——

僕の額から離れたコンパレンクルは言ったんだ。

「おふたりさん、いつか結婚してね～♪」

ラブラブになって幸せを増やしてね♡♪

そうして、ずっと、ずっと、ドキドキ・ウキウキ・ワクワク・ホワホワ・ハッピー・ピピピーピピーでいてね♡♪

キャハハッピー・ピピピーピピー♡♪」

それから――

「それでは、さよならですう♪」「さよならね♪」「バイバーイ♪」
 「さようならでござす」「さようなら〜♪」「さよならだじえーい」
 「さようならですよ♪」7枚のそれぞれから7つの声こゑが響ひびいたか
 と思おもうと、コンパース一家いっかのみんなは、沖おきへと向むかってフワリフワ
 リと空中遊泳くうちゅうゆうえいを始はじめた。

すると、そのまま海うみの上空じょうくうを遠とおざかり続つづけ、水平線すいへいせんの、はるか
 彼方かなたへと進すすみ、見みえなくなってしまうた。

「行いっちゃったね」ポツリと口くちにする瑠音るね――。

「ああ」

「なんだか、――急きゅうにさびしくなっちゃったね」

「ああ」

――このさびしさが、子どもこが巣立すだったときの親おやの気持きもちなのだ
 ろうか？

去年きょねんの春はるの、引ひ越こしのトラックのに乗のる僕ぼくを見送みおくる両親りょうしんの姿すがたが、
 ふいに心こころに浮うかんだ。

「これが、親おやの気持きもちなのかな――」そう口くちにした瑠音るねの脳裏のうりに
 も、故郷こきょうの両親りょうしんの姿すがたが浮うかんでいたらしかった。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

200

そのまましばらくの間、瑠音と僕は一緒に砂浜に座り続けた。

ザブーン、ザザザシュー…

どれくらいの時間が経ったのだろう。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

瑠音が、ふいに口を開いた。

「生きる力」ってさあ、生きるために、第7フレームの3つのステップを繰り返す力じゃないかしら？ レポートを書いている当時は、全く気づかなかったけれど——」と彼女。

「うーん。——そうだね。確かに、例えば、寒いから厚着するとか、お腹が空いたから何かを食べるとか、疲れたから休むとか、眠いから眠るとか…自分自身が生きるための営みが、結局どれも、“気づいて、決めて、動かして”のような3つのステップの繰り返しになっているのは、明らかだね」と僕。

「でしょ？ この3つのステップの繰り返しは、子育ても同じよ」

「あっ、そうか。子育ても、結局は、“観察して、判断して、行動して”のような3つのステップの繰り返し——」

「そうよ。子育ての場合は、特に“相手が生きる”ための第7フレームの3つのステップの繰り返しになっていて、まず最初に子の様子や実状をちゃんと認識しなければ、子育ては始まらない。その実状の認識があるからこそ、“その子が生きるために何をすればよいのか”の判断が的確にできて、子育てが成立するのよ。

その辺りのことは、“愛する”の反対が、単に“憎む”とか“愛される”とかだけじゃなくて、“見ないこと、無視、無関心…”でもあ

ることを、ちゃんと説明してくれているんだわ。きつと——」

「ああ、なるほど」

「それに、第7フレームの3つのステップを繰り返してれば、子側の発達に応じて、こちら側が変わったり、軌道修正したり…よりよい育児のために、育てる側も自然と育っているでしょうし——」

「ああ、そうだね」・・・「——あつ、そうだ！ それらは、きつと、子育てだけじゃなく、作品作りでも生じているプロセスだよ」

「どういうこと？」

「例えば、写真。」

あれは、ふつう、カメラのファインダーから見える画像に応じて、「構図やピント」などを何度もよりよく微調整して——それで、やっとう理想の作品へと育つ。

その過程で、“見て、決めて、調整して”って具合に3つのステップを繰り返すことによって、作品が育っているだけでなく、自身の技術が上達したり経験値がアップしたりを含めて、よりよい作画のために、作品を育てている側も自然と育っている——。

——それは、詩も同じでない？」

「そうよ！ 詩も、何度も読み返して、その都度よりよく書き直して——それで、やっとう今の作品まで育っているわ。」

その過程で、確かに、“読んで、感じて、書き直して”って具合に、3つのステップを繰り返すことによって、作品が育っているだけでなく、自身の感性が磨かれたり経験が積まれたりを含めて、よりよい作詩のために、作品を育てている側も自然と育っているね」

「そうだね。つまり、第7フレームの3つのステップを繰り返すこ

とによって何かの作品を育てている間、同時に、自分がよりよいパフォーマンスをするために自分自身も育てている。

このように作品作りの間に、作品だけでなく自分自身も育てていることは、子育ての間に、子どもだけでなく自分自身も育てていることと同じなのさ」

「おもしろーい。——そうすると、子どもを含む誰かや作品を含む何かが生きるために、それらを育てていれば、同時に、自分自身が生きるために自分自身を育てていることになるのね。

つまり、生きるための第7フレームの3つのステップの繰り返しである“生きる力”は、本来、自分自身が生きるための“力”であると同時に、誰かや何かが生きるための“力”でもありうるのね」

「そうさ。——しかも、子どもや自分自身を含む誰かや作品を含む何かが生きるために育まれることは、それらが新たに誕生したり、成長したり、発達したり、成熟したり…することでもあるから、生きるための3つのステップの繰り返しの“生きる力”は、あらゆる存在の誕生、成長、発達、成熟…とも深い関わりがあるはずなのさ」

「おもしろい♪ きっと、そうよ」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 201 に続く

201

「第7フレームの3つのステップを繰り返す営みには、本当に、いろいろなお例がありそうね？」と溜音。

「そうだね。その^{いとな}営みには、^{たと}例えば——

^{じぶん}自分^{じぶん}自身が^い生きるための^{いとな}営み、

^{せきにん}責任^もを持って^{たいおう}対応しながら^{だれ}誰かが^い生きるための^{いとな}営み、

^{こころ}心^{せんれん}ゆくまで^{せんれん}洗練させながら^{そうさくひん}創作品などの^{なに}何かが^い生きるための^{いとな}営みもある」と僕。

「そうね。その^{いとな}営みには、さらに——

^{あい}愛する^{いとな}営み、

^{はぐく}育む^{いとな}営み、

^{そだ}育つ^{いとな}営みもあるね」と彼女^{かのじよ}。

「ああ、そうさ。それに——

^{りん}臨機^{おうへん}応変させる^{いとな}営み、

^{しょ}初志^{かんてつ}貫徹させる^{いとな}営みもある」

「ええ。それに——

^とタイミングを取る^{いとな}営み、

^とバランスを取る^{いとな}営みもあるわ」

「それに——

ある^{こと}言葉^{かいぜん}を改善し^{じぶん}自分に^{いとな}ピッタリになるまで^{バージョンアップ}させる^{いとな}営み、

ある^{こと}言葉^{じつかん}のよさを実感し^{バージョンダウン}させない^{いとな}営みもある」

「それに——

よりよい^{はぐく}ライフを^{いとな}育む^{いとな}営み、

よくなった^いライフを^じ維持する^{いとな}営みもあるわ」

...

202

だいがく ねん め しょか
大学2年目の初夏——

音楽イン ♪歩み Footsteps

ぼくは、また一緒に、おじいさんに会いに岬へと向かった。

それまでの発見で溜音は十分満足していたようで、「これらが究極の意味かもしれないね？」と言っていた。

もちろん、それまでの発見も、とてもよい発見だと思った。

でも、内心——

これらの意味に、あのおじいちゃんがたどり着けなかったとは考えにくいのではないかな？

そんな気がして、僕は物足りなさを感じていた。

「この急な上り坂って—— ハア、ハア… 何度来ても、きつくてイヤだね。ほんとイヤなっちゃう～」坂を上りながらの彼女。

「“イヤイヤ”言うなって——。よけいイヤに思えてくるだろう？」と僕。

「だって、イヤなんだもん。ハア、ハア…」

「ちょっと休もうか？」

「ううん、大丈夫。ありがとう。ハア、ハア…」

思っただけどさあ。こんなに坂がきつくてイヤなのに、それでも坂を上るっていうのは—— おじいさんに会いたい気持ちか、急な坂を上るのがイヤという気持ちより、まさっているからよね？

ハア、ハア…」

「そうだね。——うん。人生、“100%好き”とか“100%いい”とかだけで成り立っているとは限らないんだね」

「ホント、微妙なときもあるよね。ハア、ハア…

実際の人生では——。ハア、ハア…」

「——確かに、好きキライ、よい悪い…が、それぞれ微妙な比率関係で成立しているときもある。だから、ときに迷ったり躊躇したりもするし—— ときに動きがとれなかったりもする」

「そうね。ハア、ハア…」

「それでも、ときには、思いきって何かのアクションを取ることに、その結果に応じた新たな別のアクションを取ることに… が必要になったりして——」

「——ええ、そうね。ハア、ハア…」

坂を上りきると——

なだらかな下り勾配の先に、キラリが見えた。

その認識は、それまでの僕らの疲れを、一瞬で吹き飛ばしてくれた。さわやかな海風とともに——

音楽 ♪歩み Footsteps 終了

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

みんなのコンパス①

第7フレーム

『  』

【完】